

本
文
篇

凡 例

本書は群書類従本「東関紀行」を底本とし、宮内庁書陵部蔵「鴨長明海道記」など五本を対校本として、その本文の異同を示したものである。本文篇の作成については大凡次のような規準に従った。

一、本 文

本文は、統群書類従完成会発行、「群書類従・第十八輯」(昭和三年四月二十五日発行、昭和三十四年十二月二十日訂正三版発行)の「群書類従 第三百三十一、紀行部五 東関紀行」の本文に従った。本文は底本のままを掲げることがを主眼とし、漢字、仮各づかい、清濁など底本のまま示すことを原則とした。ただし大方の使用の便を考慮して、次のような操作を行なった。

- 1 読みやすいように適当な箇所での改行を設けた。
- 2 底本は句点、読点を区別せず、すべて。点を施してあるが、本文には句点、読点を区別して施した。
- 3 底本には読みがなは全く施されていないが、必要と思うものだけに、歴史的仮名づかいによって、読みがなを付した。
- 4 底本にある「イ」と傍書した異文の書き入れや、勘物のたぐいはすべて割愛して示さなかった。
- 5 清濁なども底本のまま示すことを原則としたため、本文中の和歌には、底本どおり濁音の表記は施さなかった。猶、清濁に關しては、「よぐる」を「よぐる」(13④)、「なんと」を「なんと」(16②)、「ずば」を「ずば」(17⑦)、「つきて」を「つきて」(26⑬)、「かゝやき」を「かゞやき」(31⑤)になど、編者の考えによって清濁をかえた箇所がある。

二、対 校 本

対校資料として用いた諸本は次の五本で、それぞれ上記の略号を用いた。

- (1) 宮 宮内庁書陵部蔵「鴨長明海道記」
- (2) 正 正保五年板本「鴨長明道の記」
- (3) 東 東京大学総合図書館蔵「東関紀行」
- (4) 松 島原侯松平文庫蔵「鴨長明海東記」

(5) 扶 扶桑拾葉集所収本「東関紀行」

三、本文校合の規準は大凡次のとおりとした。

- 1 漢字と仮名、仮名づかい、送り仮名等の異同は原則として示さない。
- 2 漢字に読仮名を施したものは、原則として示さないことにした。ただし読仮名により音訓の異同を示しうるものは、これを掲げた。

3 校異の表示は次のようにした。

- (f) 校合箇所は、底本文下の行数をまず示し、その底本文をゴシック体で引用し、その下に―を引き、異同本文を記し、その下の()内に、校異本名を略号で示した。諸本の配列は二の掲載番号順とした。また校異本文は()内の校異本の最初に記した本の表記に従った。例えば

「一頁一行の「漸」は本書では「やうやく」と読んだが、書陵部本は「漸に」、松平文庫本は「やうやくに」、扶桑拾葉集本は「漸に」とあり、正保板本と東大本は「やうく」とあるが、それを次のように示した。

① 漸やうやく漸やうやくに(宮・松・扶)―やうく(正・東)

なお、底本の本文を対校本が有しないときは「ナシ」と記した。

- (h) 校異底本文をひく際、それが長文の場合は、その最初と最後だけを記し、中間は……で示した。例えば
みかさも……あへぬほど也―みかさもほと也(宮・正・東)
のようにした。

四、対校本略解

1 宮内庁書陵部蔵「鴨長明海道記」

縦二十二・五種、横十九種の三綴よりなる列帖装の写本で、紺色の布ばりの帙に入っており、それには

東関紀行 慶長元和頃古写本
和学講談所旧蔵

と記して左肩に貼付してある。表紙は無地の鳥の子で左肩に、表紙に直接「鴨長明海道記」と外題が記されていたと思われるが、現在は左上部の表紙が破損して「明海道記」としかみえない。表紙には「圖書寮一五四、五七〇」の函号番号などの紙が貼付

してある。料紙は鳥の子で、内題はなく、墨付三十九丁。但し三十八丁裏と三十九丁表には、次の「吾妻鏡第十九云」以下「草も木も……」の和歌を記している。今、それを記すと

吾妻鏡第十九云

建暦元年^{辛卯}十月廿三日^{辛卯}鴨社^{法名}氏人菊大者長明入道^{法名}經朝臣也^{法名}举此間下向奉謁^{法名}将軍家実朝及度之云々而^{法名}今日当幕

下將軍御忌月「參彼法華堂念誦誦経之」間懷旧之淚相催註一首歌於^{法名}堂柱

草も木もなひきし秋の霜消て^{法名}むなしき苔をはらふ山かせ

と三十九丁表二行まで書いてある。卷末にはそのほか奥書その他伝来の事情を識したものはない。巻頭に凶書寮の印と「和学講談所」の印が、卷末に「岡田真^{之藏書}」の印がある。

本文は漢字と平がなで一面に十行を書き、和歌は二行に改行して書いている。漢字には平がなで読みを示したものもある。

2 正保五年板本 「鴨長明道の記」

縦二十六・五種、横十八種の整版本である。紺色の表紙の左肩に

鴨長明道の記 ^{東関}配行 全

と書かれた題簽がはられている。内題はなく、柱刻は「長明」とだけある。二十七枚裏八行で本文が終り、二十八枚の一行から「吾妻鑑第十九云」として、前記書腰部の本と同じ鴨長明が建暦元年鎌倉へ下って実朝に拜謁したことを記した文を掲げている。本文の行数は十一行で、漢字と平仮名を用い、漢字には多く平がなで振仮名を施している。序、跋などはなく、卷末に

正保五^子歳夾鐘中句 飯田忠兵衛板行

の刊記がある。

調査した本は東京大学総合図書館所蔵のものであるが、この本は巻頭に「坂田文庫」「南葵文庫」の印があり、卷末に南葵文庫の購入が、明治三十六年十二月廿一日である旨が記されている。又、巻頭の部分に

群書一覽曰此記のはじめに仁治三年八月十日とかかり長明の鎌倉下りは建暦元年にて仁治三年よりは三十二年まへなり卷末に東鑑を引て長明の歌をも載たれと正しく此記は源親行の東関記行なり見る人誤りて混することなかれとの書き入れがある。

3 東京大学総合図書館蔵 「東関記行」

縦二十三・七種、横十七種の袋綴の写本で、黄色な表紙の左側に白の題簽がはられ、それに

というように外題が書かれ、長明道之記という題は誤りである旨が記されている。見返しに、前記正保板本と同じ「群書一覽に云此記のはしめ……混することなかれ」の書き入れがある。本文は一面十行で和歌は二行に書いている。墨付三十丁で本文は二十九丁裏の八行で終り、あと二行は白とし、三十丁表に前の二本と同じ、「吾妻鑑十九云」以下の文を掲げている。漢字、平仮名書きで漢字にはところどころ振仮名をつけている。巻頭に「南葵文庫」の印の外「木街狩野氏之文庫」などの印がおされている。奥書きその他識語などはない。

4 島原侯松平文庫蔵 「鴨長明海東記」

縦二十七・四糎、横二十・一糎の袋綴の写本で、紺色の表紙の左肩に「鴨長明海東記」と記した題簽がはられていて、内題はない。本文庫蔵本は牡丹唐草雷文つなぎの文様をもつ表紙の本が多いが、この海東記の表紙には、そのような文様はない。あるいは表紙だけは後に手を加えたのかとも思われるが、さだかではない。料紙は薄様で、遊紙は前後に各一枚あり、墨付二十四丁、一面に十行を書き和歌は改行して一行に書いている。巻末に「尚舎源忠房」と「文庫」の印がおされている。近世初期の写しで、蔵書家で聞えた島原侯松平忠房の所持本である。奥書きなどはない。現在は島原公民館に松平文庫本として所蔵されている。

5 扶桑拾葉集所収本 「東関紀行」

扶桑拾葉集巻第十一所収の「東関紀行」である。調査した松平文庫蔵本は写本で、外題は紺表紙の中央に「扶桑拾葉集」という題簽があり、内に「扶桑拾葉集 巻第十一」として目録を記し、その二十四丁に「東関紀行 源親行」と内題と、作者名として源親行をあげ、以下五十二丁まで東関紀行を記している。料紙は楮で、一面十一行を書いている。巻末の蔵書印はない。

- ①百とせ—百年(東)
 近づきて—ちかつき(東)
 漸—漸に(宮・松・扶)—やうく(正・東)
- ②首は—首へは(宮)—かうへ(正・東・松)
 にたりと—似たりとも(松)
- ③金帳—金張(松)
 すみか—柄(松)
- ④もとむ—望む(松)
- ⑤しかはあれども—しかれば(正・東)
 しばらく思ひやすらふ—暫冒休らふ(宮)
 しばらくみやすらふ(正・東)—はし—
 思ひやすらふ(扶)
- ⑥人並に—人並々(宮・正・扶)—人なみに
 (東・松)
 世に—ナジ(東)
 ふる—ふり(宮)
- ⑦つらなれり—烈れり(宮)
 朝市—朝市(正・東)
 いはれなり—謂あり(宮・松)—謂なり(扶)
- ⑧三年—三とせ(松)
- ⑨まだ—又(宮)
- ⑩空—浦(松)
- ⑪なれども—なれば(松)
- ⑫雲—浦(松)
- ⑬しばしば—暫(宮)—しばらく(正・東)
 十余の日数—十余日数(宮・松)—十余日数
 (正・東)
- ⑭野亭—野亭(松)
 幽なる—潜かなる(宮)—ひそかなる(正・
 東)—数かきなる(松)
 いたる—所に—いたり(扶)
- ⑮所々—所に(宮・正・東・松)
 心—水(宮)

齡は百とせの半に近づきて、鬢の霜漸冷しといへども、なすこと
 なくして徒にあかしくらすのみにあらず。さしていづこに住はつべ
 しくともおもひさだめぬありさまなれば、彼白楽天の身は浮雲に似た
 り首は霜ににたりと書給へる、あはれにおもひあはせらる。もとよ
 り金帳七葉のさかへをこのまず、たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ。
 しかはあれども、みやまのおくの柴の庵までもしばらく思ひやすら
 ふ程なれば、愁に都のほとりに住居つゝ、人並に世にふる道になん
 つらなれり。是即身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれなり。か
 らるほどに、おもはぬ外に、仁治三年の秋八月十日あまりの比、都
 を出て東へ赴く事あり。まだしらぬ道の空、山かさなり江かさなり
 て、はるぐ遠き旅なれども、雲をしのぎ霧を分つゝ、しばしば前
 途の極なきにすゝむ。終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間、
 或は山館野亭の夜のとまり、或は海辺水流の幽なる砌にいたること
 に、目にたつ所々、心とまるふしくをかき置て、わすれず忍ぶ人

②相坂の関―相坂の里(扶)
わたる―わたす(松)

④ほのかなり―風しつかなり(宮・正・東)
函谷―函谷(宮)

⑤おもひいでらる―おもひあはせらる(宮・
正・東・松)

⑦わびつゝ―しるつゝ(宮・正・東・松・扶)

⑧おはしけるゆへに―御座ゆへに(宮)―まし
ますゆへに(正・東)―おはしましけるゆ
へに(松)

⑨四宮河原―四の宮(正・東)

もあらばをのづから後のかたみにもなれとてなり。

東山の辺はもとなる住家あきまを出て、相坂あまきの関せきうち過るほどに、駒引こまひきわたる

望月の比も漸おだ近ぢかき空なれば、秋あきぎり立たわたりて、ふかき夜の月つきかげ

ほのかなり。木綿ゆづめ付つけ鳥とりかすかにをとづれて、遊あそ子こ猶なほ残ざん月げつに行いけん函

谷やの有あ様やうおもひいでらる。むかし蟬せみ丸まるといひける世よ捨す人ひと、此こ関せきの辺

にわらやの床とこを結むすびて、常とこは琵琶びばをひきて心こころをすまし、大和歌たいわかを詠

じておもひを述のけり。嵐あらしのかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける。

ある人の云い、蟬せみ丸まるは延ひ喜よろこ第だい四よの宮みやにておはしけるゆへに、此こ関せきのあ

たりを四し宮みや河原がはらと名な付つけたりといへり。

いにしへのわらやの床とこのあたり迄

心こころをとむる相坂あまきの関

東とう三さん条じょう院いん石山いしやまに詣まうて還かへ御ごありけるに、関せきの清きよ水みづを過すさせ給たまふとて

よませ給たまひける御歌ごた、あまたゝひゆきあふ坂さかの関水せきみづにけふをかきり

の影かげそかなしきときこゆるこそ、いかなりける御心ごこころのうちにかと哀

⑬御歌―御哥ごたに(宮・正・東・松)

⑭給ふとて―給たまふ(宮)

② 関山を―関山こえ(松)

③ 見わからず―見分す(宮)―見わかず(正・東)―見わかれず(松)―見分られず(狭)

④ 都うつり―うつり(宮・正・東)
岡本の―ナシ(松)

⑤ ふるき―ふかき(宮)

に心ぼそけれ。

関山せきやまを過ぬれば、打出の浜粟津の原なんどきけども、いまだ夜の

うちなれば、さだかにも見わからず。昔天智天皇の御代、大和国飛

鳥すがの岡本の宮より近江の志賀こほりの郡に都うつりありて、大津の宮をつ

くられけりとさくにも、此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえて

あはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れるしかのふる郷

⑨ うち渡す―うちす(宮)―うち渡る(松)

⑩ 歌―ナシ(宮・正・東)―哥に(松)

⑪ はかなく―はかなくて(宮・正・東)

曙の空になりて、せたの長橋うち渡すほどに、湖はるかにあらは

れて、かの満誓まんぜい沙弥しゃみが比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌おもひ

出られて、漕行舟そうぎふねのあとのしら波、誠にはかなく心ぼそし。

世中よなかを漕行舟そうぎふねによそへつゝ

なかめし跡を又そなかむる

このほどをも行過て、野路のぢと云所にいたりぬ。草の原露しげくし

①とこるせしと心細し(宮・正・東・松)

て、旅衣いつしか袖のしづくところせし。

東路の野ちの朝露けふやさは

袂たもとにかゝるはしめ成覽なるり

③かゝる―かくる(宮・扶)
はしめ―ほしめ(松)

④西東へ―東へ(宮・正・東・松)
里人―里人の(宮)

しの原と云所をみれば、西東へ遙にながき堤あり。北には里人住

⑤見えわたる―見えわたり(正・東)
むかひの汀―むかへのみきり(宮・松)

家をしめ、南には池のおもて遠く見えわたる。むかひの汀みきは、みどり

⑥ひとつになり―ひとつなり(宮・正・東・松)
ひたさねども―ひたさねは(宮・正・東・松)

ふかき松のむら立、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねど

⑧あしでをかける―あし手をかくる(宮・正・東)
―足手をかへす(松)

も青くして澗瀆くわつやうたり。洲崎所々に入ちがひて、あしかつみなどおひ

⑩のみ―ナシ(宮・正・東・松)
多くして―おほくて(松)

わたれる中に、をしかものうちむれてとびちがふさま、あしでをか

⑪淵瀬―瀬(宮・正・東)
かぎらざりけめとおぼゆ―かぎらざりける
とおほゆれ(扶)

ちすぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらに成行など聞こそ、か

⑫行人も―ゆく人の(松)

はりゆく世のならひ、飛鳥の河の淵瀬にはかぎらざりけめとおぼゆ。

行人ゆくひともとまらぬ里となりしより
荒のみまさるのちの篠原

⑭なくの翁―奈良の翁(宮)―七翁ななむね(正・東)

鏡の宿にいたりぬれば、昔なくの翁のよりあひつゝ、老をいとひ

①中に―うち(正・東)

②老やしぬると―老やしぬる(宮・正・東・松)
此山の事―此こと(宮・正・東・松)
からまほしく覚えけれども―からまほしけれとも(宮・正・東・松)

④過なん―過げん(松)

⑦とこの―床のあたり(宮・正・東・松)
都には―都を(宮・正・東・松)

⑨かくや―かくやと(松)
哀なり―哀なるうちにも(松)

⑩られて―られ(松)

てよみける歌の中に、鏡山いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身は

老やしぬるといへるは、此山の事にやおぼえて、宿もからまほしく覚えけれども、猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ。

たちよらてけふは過なん鏡山

しらぬ翁のかけはみすとも

ゆき暮ぬれば、むき寺と云山寺のあたりにとまりぬ。まばらなる

とこの秋かぜ、夜ふくるままに身にしてみて、都にはいつしか引かへ

たるこゝちす。枕にちかきかねの声、暁の空にをとづれて、かの遺

愛寺の辺の草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり。行末とをきた

びの空、思ひつゞけられていたう物がなし。

都出ていくかもあらぬこよひたに

かたしきわひぬ床の秋風

この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに、おいその杜と云杉
むらあり。下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも、はかなく

① 遠からず—とをから(東)

移る月日なれば遠からずおぼゆ。

かはらしな我もとゆひに置箱も

名にしおいその杜の下草

④ くらき—たかき(正・東)
木のしたの—木枝(宮)—木の枝(正・東)—
木の下(松)

音にきゝしきめが井を見れば、陰くらき木のしたのいはねより流

出る清水、余り涼しきまですみわたりて、実まことに身にしむばかりなり。

⑥ 余熱—余勢(宮・正・東)
往還—往来(松)

余熱いまだつきざる程なれば、往還わうくわんの旅人多く立よりてすゞみあへ

⑦ 秋風にかくて—岸風にかへて(松)—秋風に
かくれて(扶)

り。斑婕はんせつ好よが団雪だんせつの扇、秋風にかくて暫忘しばらくれぬれば、すゑ遠き道な

⑧ 道のへに—道の辺の(松)

れども、立さらん事はものうくて更にいそがれず。かの西行が道の

へに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれとよめるも、

かやうの所にや。

道のへの木陰の清水むすふとて

⑫ すゝまぬ—やすらふ(扶)

しはしすゝまぬ旅人そなき

かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝりぬ。谷川霧の底に

⑭ 山風—風(正・東)
梢—声(松)

音信おとづれ、山風松の梢しんに時雨わたりて、日影もみえぬ木の下道あはれに

①心ぼそし—心ほそく(松)

こえ—或(松)

萱屋の—ナシ(松)

板庇—板廊(宮)

②みゆるにも—みゆるも(宮)

③めぐらしがたければ—まさりかたければ

(宮)—まはりがたければ(正・東)

④中中に—中々(宮)

⑥立出て—音出て(宮)

⑦晴天—はれの空(松)

月なみも—月なみに(松)

すみ渡れり—すみわたり(宮・松)

⑧遠く—ナシ(宮・正・東・松)

いと—いと(松)

⑩株瀬川—株川(宮・松)

幽吟を中秋—ゆうぎんの中秋(宮・正・東)

—ゆうぎんを中糶(松)

三五夜—三五(扶)

⑪かつぐ—ナシ(松)

遠情—遠情(正・東)

先途—前途(松)

をくる—をくる(宮)

⑫書つくる—かきつけける(宮)

心ぼそし。こえはてぬれば不破の関屋なり。萱屋の板庇年経にけり
とみゆるにも、後京極撰政殿の荒にしのはた、秋の風とよませ給
へる歌おもひ出られて、此うへは風情もめぐらしがたければ、いや
しきことの葉をのこさんも中中におぼえて、爰をばむなくうち過
ぬ。

くるぜ川と云所にとまりて、夜更るほどに川端に立出てみれば、
秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて、照月なみも数みゆばかりす
み渡れり。二千里の外の古人の心遠く思ひやられて、旅のおもひい
とをさへがたくおぼゆれば、月のかげに筆を染つゝ、花落を出て
三日、株瀬川に宿して一宵、しばし幽吟を中秋三五夜の月にいた
ましめ、かつぐ遠情を先途二千里の雲にをくるなど、ある家の障
子に書つくるついでに、

しらすりき秋の半の今宵しも
かゝる旅ねの月をみんとは

① ひびくばかりに—響はかりに(宮)

② あたりたるとぞいふ—あたりたるとも云
(扶)

③ 往還—往還(正・東)—往来(松)

かやつの東宿の前を過れば、そこらの人あつまりて、里もひびく

ばかりにのゝしりあへり。けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる。往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも、かのみてのみや

人にかたらんとよめる花のかたみには、やうかはりておぼゆ。

花ならぬ色香もしらぬ市人の

徒ならてかへる家つと

④ 夕日のかげ—夕日かけ(宮・正・東)

⑤ あけの玉垣色をかへたるに木綿四手—ナンシ
(宮・正・東)—あけの玉垣色をそへたる
にしめゆふに彼ゆふして(松)

⑥ ねぐら—ナンシ(宮・正・東・松)

⑦ 驚むら—驚むら(松)

⑧ 速く—とをし(宮・正・東・松)

⑨ 声こゑ—声(宮・正・東・松)

⑩ はじめは—はじめて(宮・正・東)—はじめ
(松)

⑪ 大和言葉—大和哥(宮)
是よりははじまりけり—是よりそはしまる
(宮)—是よりそはじまれる(正・東・松)

尾張国熱田の宮にいたりぬ。神垣のあたりちかければ、やがてま

いりておがみ奉るに、木立年ふりたる杜の木の間より夕日のかげた

えだえさし入て、あけの玉垣色をかへたるに、木綿四手風にみだれ

たることから、物にふれて神さびたる中にも、ねぐらあらそふ驚む

らのかずもしらす梢こすねにきゐるさま、雪のつもれるやうに見えて、遠

く白きものから、暮行まゝにしづまり行声ごゑも心すぐく聞ゆ。あ

る人のいはく、此宮は素盞鳥尊なり。はじめは出雲国に宮造ありけ

り。八雲たつといへる大和言葉も是よりははじまりけり。其後景行天

①この砌―砌(宮)
又いはく―又云(正・東)

本躰は―本躰(扶)
②号し―申(正・東)

③尊は白鳥となりて去給ふ劍は―ナシ(宮・正・東)

④ともいへり―とも矣(宮・正・東)―といへり(松)

⑤下りける―下りたりける(正・東・松)

⑥とげける―とげたりける(宮・正・東・松)

吾願―吾願(宮)
古郷に―故郷へ(宮・正・東・松)

⑨思ひ出の―おもひ出も(宮・正・東・松)

⑩たち出―たちて(宮・正・東・松)
⑪わたれる―わたり(宮・正・東・松)
すゞるに―心に(宮・正・東・松)

皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりといへり。又いはく、此宮の本

躰は草薙くさなぎと号し奉る神劔也。景行の御子日本武尊と申、夷えびすをたいら

げて帰り給ふ時、尊は白鳥となりて去給ふ。劔は熱田にとまり給ふ

ともいへり。一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり。長保のすゑ

にあたりて当国の守にて下りけるに、大般若を書て此宮にて供養を

とげける願文に、吾願已にみちぬ。任限又みちたり。古郷にかへら

んとする期いまだいくばくならずとかきたるこそ、哀に心ぼそく聞

ゆれ。

思ひ出のなくてや人のかへらまし

法の形見をたむけをかすは

この宮をたち出、浜路におもむくほど、有明の月かげふけて、友

なし千鳥ときどくをとづれわたれる、旅の空のうれへすゞるに催し

て、哀かたくふかし。

古郷は日をへて遠くなるみかた

① 汐干の道そくるしきしほてのみちそくなく
なき(宮・正・東)―塩干の道そくなく

② こえ過る―過し(宮・正・東)
(松)

③ 漸―漸々(宮)
 わたれり―わたり(宮)
 空も―雲も(宮・松)

いそく汐干の道そくるしき

やがて夜のうちに二村山にかゝりて、山中などをこえ過るほどに、

東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれり。波も空もひとつに

て、山路につゞきたるやうに見ゆ。

玉くしけ二村山のほのくと

明行末は波路なりけり

ゆきくゝて三河国八橋のわたりをみれば、在原業平かきつばたの

歌よみたりけるに、みな人かれいるのうへになみだおとしける所よ

とおもひ出られて、そのあたりをみれども、かの草とおぼしき物は

なくて、いねのみぞおほくみゆる。

花ゆへにおちし涙のかたみとや

稲葉の露を残しをくらん

源義種が此国のかみにてくだりける時、とまりける女のもとにつ

かはしける歌に、もろともにゆかぬ三河の八はしを恋しとのみや思

⑬ 源義種が―源の義雅が(正・東)―みなもと
 のよしたね(松)

②いでて―立て(宮・正・東・松)

③定基―定元(正・東)
哀に思ひいでられて過がたし―哀なり(宮・正・東・松)

④心をしもしるべとし―心をしもるへし(宮)
―心をしもかへし(正・東)―心をしもし
るへにて(松)

⑦別路に―別しに(宮・正・東・松)

⑧いかてか―はかてか(宮)

⑨望―うみ(正・東)―望みも(松)

⑩秦旬―秦旬(宮・松)

⑫古武蔵の前司―故武蔵のつかさ(宮・正・東・松)

⑬たよりの―たより(松)
たのむまで―たのむまで(松)

ひわたらんとよめりけるこそ、おもひ出られてあはれなれ。

やはぎといふ所をいでて、みやぢ山こえ過るほどに赤坂と云宿あり。こゝにありける女ゆへに大江定基が家を出けるも哀に思ひいでられて過がたし。人の発心する道その縁一にあらねども、あかぬ別をおししまよひの心をしもしるべとし、誠の道におもむきけん、ありがたくおぼゆ。

別路に茂りもはてゝ葛のはの

いかてかあらぬかたに返りし

ほむの川原にうち出たれば、よもの望かすかにして山なく岡なし。

秦旬しんでんの一千余里を見わたしたらんこゝちして、草土ともに蒼茫さうぼうたり。

月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ。茂れるさゝ原の中にあまた

ふみわけたる道ありて、行末もまよひぬべきに、古武蔵の前司道の

たよりの輩ともがらに仰て植をかれたる柳もいまだ陰とたのむまではなけれ

ども、かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり。もろこしの

- ① 召公奭（正・東）
 成王（正・東）
 三公（正・東） 三上（松）
 ② 陝（晉・宮・正・東・扶）
 政を（松）

- ⑤ 国民（宮・正・東・松）
 召公（正・東）

- ⑥ 木を（木・東）

- ⑦ おはしまし（宮・正・東・松）
 任国（正・東）
 州（正・東）
 ⑧ 風月（正・東）
 一（松）

- ⑩ 追て（正・東）
 隣む（正・東）

- ⑪ 道（宮）

- 往還（正・東）
 一（松）

- ⑫ 召公（正・東）
 一（松）

- ⑬ かけと（宮・正・東）

召公奭（せうこうせき）は周の武王の弟也、成王の三公として燕と云国をつかさどり
 き。陝（せん）のにしのかたを治し時、ひとつの甘棠のもとをしめて政をを
 こなふ時、つかさ人よりはじめてもろくの民にいたるまで、その
 もとをうしなはず、あまねく又人の患（うれ）をことはり、おもき罪をもな
 だめけり。国民（くにたみごと）拳りて其徳政を忍ぶ故に、召公去（きり）にし跡までも、彼
 木を敬て敢てきらず、うたをなんつくりけり。後三条天皇東宮にて
 おはしましけるに、学士実政任国に赴く時、州の民はたとひ甘棠の
 詠をなすとも忘るゝことなかれ、おほくの年の風月の遊びといふ御
 製をたまはせたりけるも此こゝろにや有けん、いみじくかたじけな
 し。かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ物を憐むあまり、
 道のほとりの往還の陰までも思ひよりて植をかれたる柳なれば、こ
 れを見む輩皆かの召公を忍びけん、国の民のごとくにおしみそだて
 て、行すゑのかけとたのみむこと、その本意はさだめてたがはじと
 こそおぼゆれ。

③豊河―よかは(正・東)
みちをば―道は(正・東・松)

④近比より―近比(宮)―ちかき比(正・東・松)

⑤あたらしきに―あたらしきを(宮)

⑥あうかれん―いそかれん(松)

⑩いさ豊河の―とよ川の(宮)―よかはの川の
(正・東)―いまとよ川の(松)

⑫高師の山―たかし山(松)
ほどに―ほと(宮・正・東・松)

⑬云―いふなる(松)

植置しぬしなき跡の柳はら

猶その陰を人やたのまん

豊河と云宿の前をうち過るに、ある者のいふをきけば、此みちを
ば昔よりよくるかたなかりし程に、近比より俄にわたふ津の今道と
云かたに旅人おほくかゝる間、いまはその宿は人の家居をさへ外ほかに
のみうつすなどぞいふなる。ふるきをすててあたらしきにつくなら
ひ、さだまれることといひながら、いかなるゆへならんとおぼつか
なし。昔より住つきたる里人の今更あうかれんこそ、かの伏見の里
ならねども、あれまくおしく覚ゆれ。

覚束ないさ豊河のかはる瀬を

いかなる人のわたりそめけん

参河遠江のさかひに高師たかしの山と聞ゆるあり。山中にこえかゝるほ
どに、谷河のながれ落て岩瀬の波ことごとくしくきこゆ。境川とぞ云。
岩つたひ駒うち渡す谷川の

②けしきいと—景氣殿(宮)―景氣いと(正・東)―けしきいと(松)―いと(扶)

③湖海—海湖(宮・正・東・松)―潮の海(扶) 漁舟—漁船(松)

④岸に—ナシ(東)

⑤むせぶ—むかふ(松) izzれと—izzれも(宮・正・東・松)

⑦雲—空(松)

⑧心ぼそし—心ほそく(宮・正・東)

⑩此宿—此やと(松) とまりたりし—とまりし(扶) わらやの—わらや(宮)―萱屋の(松)

⑭床の下に—床のことに(宮)―床の底に(正・東) うち詠じ—うちなかめ(宮・正・東)―打詠(松) こぞ—にそ(宮・松)―にも(正・東)

音もたかしの山にきにけり

橋本と云所に行つきぬれば、きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし。南には潮海あり、漁舟波にうかぶ、北には湖水有、人家岸につらなれり。其間に洲崎遠くさし出て、松きびしく生つゞき、嵐しきりにむせぶ。松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし。行人心をいたましめ、とまるたぐひ夢をさまさずといふ事なし。みづうみにわたせる橋を浜名となづく。ふるき名所也。朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし。

行とまる旅ねはいつもかはらねと

わきて浜名の橋そ過うき

さても此宿に一夜とまりたりしやどあり。軒ふりたるわらやのところでまばらなるひまより、月のかげ曇なくさし入たる折しも、君どもあまたみえし中に、すこしおとなびたるけはひにて、夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じたりこそ、心にく

①おぼえしか—おぼえし(宮)

②もる—なる(松)

③みえにき—見えけり(扶)

④まひざはの原—まひはのはら(東)

⑥繡草—緑草(松)
真砂—沙(宮)—沙(正・東)

⑦積れる—積る(松)

其間に—其間も(扶)
音信—をとつる(松)

⑧庵—庵の(松)
所々—所々に(正・東・松)

⑩あれにけるにや—あれにける小屋(松)—あれ
れわたりてや(扶)

⑫雨露も—雨露(宮・正・東・松)

⑬有けり—有ける(宮)

御前—御前(正)
けるが—ける(松)

もし—ナン(東)
この本意を—この本意(正・東)—本意を
(松)

くおぼえしか。

言のはの深き情は軒端もる

月のかつらの色にみえにき

なごりおほくおぼえながら、此宿をもうち出て行過るほどに、ま

ひざはの原と云所に来にけり。北南は眇々とはるかにして、西は海

の渚近し。錦花繡草のたぐひはいともみえず、白き真砂のみありて

雪の積れるに似たり。其間に松たえぐ生渡りて、塩かぜ梢に音信、

又あやしの草の庵所々みゆる、漁人釣客などの栖にやあるらん、す

ゑ遠き野原なればつくくとながめゆくほどに、うちつれたる旅人

のかたるをきけば、いつのころよりとはしらず此原に木像の観音お

はします。御堂など朽あれにけるにや、かりそめなる艸の庵のうち

に雨露もたまらず年月を送るほどに、一とせ望むことありて鎌倉へ

くだる筑紫人有けり。此観音の御前にまいりたりけるが、もしこの

本意をとげて古郷へむかはと御堂をつくるべきよし心のうちに申置

① 侍りけり―たりけり(宮・松)―たりける
 (正・東)
 こと―事の(宮)

③ 煙―匂ひ(宮・正・東・松)
 さそはれ―誘引て(宮)―さそひて(正・東)
 ―さそはれて(松)

花も露鮮なり―花の露も鮮にみゆ(扶)

④ 計帳―戸ちやう(宮)―とちやう(正・東・松)

斗帳(扶)

紐―隙(松)

弘誓―猶誓(宮)

⑦ 有―あり(正・東)―ある(松)

⑧ はげしくみゆ―猛しきとみゆる(宮・正・東)
 ―けはしきと見ゆる(松)

秋の水―秋水(宮)

⑨ 舟の―松の(東)

往還―往来(松)

たやすく―容易(宮)

むかひ―むかへ(宮・松)

⑩ みつまされる……くつがへりて底―ナシ

(宮・正・東)

みつ―ナシ(松)

時―時は(松)

⑫ 人の心に……流ぞかしと―ナシ(宮・正・東)

て侍りけり。鎌倉にて望むことかなひけるによりて、御堂を造ける

より、人多くまいるなんどぞいふなる。聞あへずその御堂へ参りた

れば、不断香の煙風にさそはれうちかほり、あかの花も露鮮なり。

願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば、弘誓ぐせいのふかき事うみ

のごとしといへるものもしくおぼえて、

たのもしな入江に立るみをつくし

深き験しるしの有と聞にも

天竜と名付たるわたりあり、川ふかく流れはげしくみゆ。秋の水

みなぎり来て、舟のさること速なれば、往還の旅人たやすくむかひ

の岸につきがたし。此河みづまされる時、ふねなどもをのづからく

つがへりて底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ、彼巫峽むいかたの水の

流おもひよせられていと危き心ちすれ。しかはあれども、人の心に

くらぶれば、しづかなる流ぞかしとおもふにも、たとふべきかな

きは世にふる道のけはしき習ひ也。

此河のはやき流も世中の

人の心のたくひとは見す

遠江の国府こぶいまの浦につきぬ。爰に宿かりて一日二日とどまりた

るほど、あまの小舟さふねに棹さしさしつゝ浦の有さま見めぐれば、しほ海湖うみうづらみ

の間に洲崎遠くへだたりて、南には極浦の波袖うらはを湿し、北には長松

の嵐あらし心をいたましむ。名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日

のめうつりなからずは、是も心とまらずしもあらざりましたなどはお

ぼえて、

波の音も松の嵐もいまの浦に

昨日の里の名残をそきく

ことのまゝと聞ゆる社おはします。その御前をすぐとて、いさゝ

かおもひつゞけられし。

ゆふたすきかけてそ頼む今思ふ

ことのまゝなる神のしるしを

② たくひとは―たくひとそ(宮・正・東・松

・扶)

見す―見る(正・東・扶)

③ 国府―ナシ(宮・正・東・松)

とどまりたる―とまりたる(正・東)―泊り

たる(松)

④ ほど―程に(宮・正・東)

小舟に―小船(松)

湖―ナシ(宮・正・東)

⑤ 間に―あひたより(宮・正・東・松)

湿し―潤し(正・東・松)

⑥ 嵐―風(宮・正・東・松)

心―ナシ(松)

⑦ めうつり―めそへり(宮・正・東・松)

相似たる―にたる(宮・正・東・松)

おぼえて―覚え(宮・正・東)

⑨ いまの浦―いま浦(松)

⑩ このまゝ―このまゝ(宮・正・東・松)

⑪ おもひつゞけられし―おもひつゞけられし

(宮)

⑫ しるしを―しるしに(扶)

②名所なりとは一名所とは(宮・正・東・松)
北は―とは(松)

③野山―山(松)
しげし―しげく(松)

④みち雲に―白雲に(宮・正・東・松)
鹿―麻(宮)

⑥踏かよふ―ふみまよふ(宮・正・東・松・扶)

⑧山をも―山を(正・東)
去にし―さりにし(宮・正・東)

⑨宗行―家行(宮・正・東・松)
人の―人(宮・正・東・松)
くだられけるに―下されけるに(扶)
⑩とまりけるが―とまりたりけるが(宮・正・東・松)

菊水―菊の水(正・東)
汲で―汲て(正・東・松)
⑪菊川西岸に―菊川のにしの岸に(宮・正・東)
東―菊川の西岸に(松)

柱に―障子に(宮・正・東・松)
⑫たりけり―たりける(宮・正・東・松)
いと―ナシ(宮・正・東・松)
⑬のこらずと申もの―残らぬよし申すもの
(宮・正・東)―のこらぬよし申ことの
(松)

小夜の中山は、古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば、名

高き名所なりとは聞きたれども、みるにいよく心ぼそし。北は深山にて松杉嵐はげしく、南は野山にて秋の花露しげし。谷より嶺にうつるみち、雲に分入心地して、鹿の音^ねなみだをもよほし、虫のうらみあはれふかし。

踏かよふ峯の梯^{かげし}とたえして

雲にあとふ佐夜の中山

此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所あり。去にし承久三年の秋の比、中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが、昔は南陽県の菊水下流を汲で齡をのぶ、今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふと、ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば、いとあはれにて其家を尋るに、火のためにやけて、かの言のはものこらずと申ものあり。今は限とてのこし置けむかたみさへあとなくなりけるこそはかなき世のならひ、

①いとゞいと(宮)

いとゞあはれにかなしけれ。

かきつくるかたみも今はなかりけり

跡は千年と誰かいひ^{けん}劔

④いくほどもなく―いく程なく(松)
こはま―こまは(宮・松・扶)―二はま(正・東)

菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり。こはまとぞいふな

⑥中に―うちに(正・東)

。此里のひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる奥より大井川を見渡したれば、遙々とひろき河原の中に一すぢならず流わかれた

⑦様にて…物をしたる―ナシ(宮・正・東)
様にて―やうにて(松)
したるに―たり―したるに―たり(扶)

る川瀬ども、とかく入ちがひたる様にて、すながしといふ物をしたるに―たり。中々わたりてみむよりもよそめおもしろくおぼゆれば、

⑧かの紅葉―彼みち(宮)

かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねども、しばしやすらはる。

日数ふる旅のあはれは大井河

わたらぬ水も深き色かな

まへ嶋の宿をたちて、岡部のいますくをうち過るほど、かた山の

松のかげに立よりて、かれないなど取出たるに嵐^{すさま}冷しく梢にひゞき

わたりて、夏のまゝなる旅ごろもうすき袂もさむくおぼゆ。

⑨宿―すく(宮・正)
たちて―たち(東)
いますくを―います(松)
ほど―程に(松)
⑩梢に―橋に(宮・正・東)
⑪袂も―たもとに(正・東)

② 嵐に―あらしよ(正・松)

③ かえでは―かつらは(宮・正・東)―かつら
の(松)

④ かの―ナシ(松)

程は―ほど(宮・正・東・松)

⑥ 打入て―たち入て(宮・正・東・松)

⑦ 僧―僧正

画像―絵像(正・東)

⑧ さらに―ナシ(松)

はじめを―はじめ(宮・正・東・松)

尋きけば―たつめれば(宮・正・東)―たつ
ねければ(松)

⑨ おもひはなれたる―おもひはれたる(宮・
正)―おもひ入たる(松)

⑩ 堪たるかたなければ―堪たるかたなれば
(宮・松)―堪さるかたなれば(正・東)

理―理(正)

⑪ 念ずるに―念ずる(松)

難行苦行―難行易行(宮・正・東)―難行喝
行(松)

二の道―二道(松)

かけたり―かけたる(松)

⑫ 山の中―山中(宮・正・東)

眠れる―ねふれる(宮・正・東)

里にありて―里ありて(宮)

⑬ 叔齋―叔齋(宮)

雲―空(宮・正・東)

入て―入し(宮・正・東・松)

三春の蕨―三春を蕨(宮)

とり―とる(宮・正・東)

是そこのたのむ木のもと岡へなる

松の嵐に心してふけ

宇津の山をこゆれば、つたかえではしげりてむかしのあとたえず。かの業平がす行者にことづてしけん程はいづくなるらんと見行ほどに、道のほとりに札をたてたるをみれば、无缘の世すて人あるよしをかけり。みちより近きあたりなれば少打入てみるに、わづかなる草の庵のうちに独の僧あり。画像の阿弥陀仏をかけ奉て、浄土の法もんなどをかけり。其外にさらにみゆる物なし。発心のはじめを尋きけば、わが身はもと此国のものなり。さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ、其身堪たるかたなければ、理を観ずるに心くらく、仏を念ずるに性ものうし。難行苦行の二の道ともにかけたりといへども、山の中に眠れるは、里にありて勤たるにまされるよし、ある人のをしへにつきて、此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよしをこたふ。むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をとり、許由が

①器―器物(官)―器(正・東)―うつはもの
(松)

②よすが―よすから(松)

③やどして―やとし(松)

④中々―なか(官・正・東)
心にくし―心ほそし(官・正・東・松)

⑥濁らまし―おこらまし(官)―おらまし(正・東)―のこらまし(松)

⑦住居―住家(正・東)

⑩せに―瀬に(官)
した道―細道(官・正・東・松)

⑪その―ナシ(松)

⑫我も又こゝを―我は又これを(官・松)―われは又爰を(正・東)

穎水の月にすみし、をのづから一瓢の器をかけたるといへり。此庵

のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず、柴折くぶるなぐさめまでも思ひたえたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして、心を浄域の雲の外にすませる、いはねどしるくみえて、中々あはれに心にくし。

世をいとふ心のおくや濁らまし

かゝる山辺の住居ならては

此庵のあたり幾程遠からず、峠と云所にいたりて、おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに歌どもあまた書付たる中に、東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし薦のした道とよめる、心とまりておぼゆれば、そのかたはらにかきつけし。

我も又こゝをせにせんうつの山

分て色ある薦のした露

猶うちずぐるほどに、ある木陰に石をたかくつみあげて、めにた

②成にけり―成ける(松)
口ずさみ―くちつけ(宮・松)

③草のみ―草(宮)―草の(正・東・松)
是も―是(宮・正・東・松)

④残らじ―よものこらし(宮・松)

⑤旅人―人(正・東)

⑥將軍二代―二代將軍(扶)

憐りに―國に(宮・正・東)

⑦ことにか―事か(宮・正・東・松)
ふかくして―ふかくし(宮)

⑧きかは―関川(松)

⑩きゝしが―聞しかは(宮・松)

有けるよ―有けり(宮・正・東・松)

⑪あはせらる―あはせる(宮・正・東)
かの志戸と―のと三とくと(宮・正・東―
後しと)(松)

⑫御座しける―御座にける(宮)―ましくに
ける(正・東―おはしましにける(松)
御跡―あと(松)

⑬床とても―内にも(宮)―床にても(松)

⑭つけ給はるに―うけたまはるには(扶)
つけ給はるに―ましてしもさまのものは
申にをよねども―承及はねとも(松)

つさまなる塚あり。人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ。道のか
たはらの土と成にけりと見ゆるにも、頭基中納言の口ずさみ給へり
けん、年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて、是も又
ふるきつかとなりなば名だにも残らじとあはれ也。羊太傳が跡には
あらねども、心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ。かの梶
原は將軍二代の恩に憐り、武勇三略の名を得たり、かたはらに人な
くぞみえける。いかなることにかありけん、かたへの憤ふかくして、
たちまちに身をほろぼすきになりければ、ひとまどものびんと
やおもひけむ、都のかたへはせのぼりけるほどに、駿河国きかはと
いふ所にてうたれにけりときゝしが、さはこゝにて有けるよと哀に
思ひあはせらる。讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて、かの志戸と
云処にてかくれさせ御座しける御跡を西行修行のついでにみまいら
せて、よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせんと
よめりけるなどうけ給はるに、ましてしもさまのものは申にを

① みるには―見るに(松)
いと―最(宮)

③ けり―ける(松)

④ 過うくて―過て(松)
しばし―須臾(宮・扶)

石村々―石むら(松)

⑤ 咽び―咽ぶ(宮・正・東・松)

ところ々―所々に(宮・正・東・松)

たなびけり―なびきにけり(宮・正・東・松)

⑥ おもひ出―思ひ(宮・正・東)

⑦ 謀反―逆謀(宮・正・東)
おこしたりけり―おこしける(宮・正・東)

民部卿―宇治民部卿(宮・正・東・松)

⑧ 関に―関の(松)

滋藤―重藤(正・東)

⑨ 民部卿に―民部卿(宮・正・東・松)

⑩ 火のかけ―火影(宮)―火影(東)

寒くして―寒して(正)

焼―やく(松)

⑪ 詠じ―なかめ(宮・正・東・松)

民部卿泪をながしける―涙を民部卿なかし

けり(宮・正・東・松)

⑫ 関―こゝ(松)

よばねども、さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ。

あはれにも空にうかれし玉梓の

道のへにしも名をとゝめけり

清見が関も過うくてしばしやすらへば、沖の石村々塩干にあらは

れて波に咽び、磯の塩屋ところ々風にさそはれて煙たなびけり。

東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也。むかし朱雀天皇の御時、

将門と云もの東にて謀反おこしたりけり。是をたひらげんために民

部卿忠文をつかはしける、此関にいたりてとどまりけるが、清原滋

藤といふ者、民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行けるが、漁

舟の火のかけは寒くして浪を焼、駅路の鈴の声はよる山をすぐと云

唐の歌を詠じければ、民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり。

清見かた関とはしらて行人も

心計はとゝめをくらむ

この関遠からぬほどに興津といふ浦あり。海に向ひたる家にやど

① 侍れば—とまりたれば(宮・正・東・松)

りて侍れば、いそべによする波の音も身のうへにかゝるやうにおぼえて、夜もすがらいねられず。

③ 磯へ—磯ね(松・扶)

清見かた磯へに近きたひ枕

④ ぬれけり—ぬれつ(宮・正・東)

かけぬ浪にも袖はぬれけり

⑤ まどろむ—おとろむ(東)
枕の—枕(松)

こよひは、さらにまどろむ間だになかりつる草の枕のまろぶしな

⑥ 寝覚とも—寝覚も(宮・正・東・松)

れば、寝覚ともなき暁の空に出ぬ。くきが崎と云なるあら磯の岩の

⑦ うちよする—打寄る(宮)—打よる(正・東)

はざまを行過るほどに、沖津風はげしきにうちよする波もひまなけ

れば、いそぐ塩干のつたひみち、かひなき心ちして、ほすまもなき

⑧ までは—まで(宮・松)
かけても—あけても(松)

袖のしづくまでは、かけてもおもはざりし旅の空ぞかしなど打なが

められつゝいと心ぼそし。

⑨ ぬれく—ぬれぬれて(松)

⑩ 神原—蒲原(宮)—蒲原(正・東)—かん原
(松)

沖津風けさあら磯の岩つたひ

いふ^{イナシ}宿(東)

浪わけ衣ぬれく—そ行

宿—宿(正)

うちとをる—とをる(宮・正・東・松)

まちつけんとて—待けんとして(松)—待つけ

んまで(扶)

⑭ 立入たるに—立入たる(宮・正・東・松)

物を—物(宮・正・東)

神原^{かんばら}といふ宿のまへをうちとをるほどに、をくれたる者まちつけんとてある家に立入たるに、障子に物をかきたるをみれば、旅衣す

- ①庵のいほり—庵の(東)
つもる—積り(松)
- ②あるらん—あるらん(宮)
庵を—庵(松)
- ③隠士—陰士(松)
今—いまは(宮・正・東・松)
- ④宿をかる—宿かる(宮・正・東・松)
雪を—雪(正・東)—しもを(松)
- ⑤かれもこれも—彼是も(宮・正・東・松)
- ⑥夜に—夜は(宮・正・東・松)
- ⑨青して—あをくして(宮)—あをうして(正・東)
よれる—よれり(宮・正・東・松)
- ⑩みゆ—見ゆる(松)
白衣の—白衣(宮)—白衣(正)—白衣(東)
美女二人ありて—美女有て二人(宮・正・松)
—美女あつて二人(東)
- ⑪頂に—岑に(正・東)
都良香—都良香(正・東)
書たり—かきたる(宮・正・東)—書たるは
(松)
- ゆへにか—ゆへか(宮・正・東・松)
- ⑬白雲を—しら雪を(宮)
- ⑭天津乙女の—あまつをとめか(宮・正・東)

そのの庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり。
心ありけるたび人のしわざにやあるらん、昔香炉峯の麓に庵をしむ
る隠士あり、冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり。今富士の山のあた
りに宿をかる行客あり、さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる、
かれもこれともに心すみておぼゆ。

冴る夜に誰こゝにしもふしわひて

高ねの雪を思ひやりけん

田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば、時わかぬゆきなれども、
なべていまだ白妙にはあらず、青して天によれるすがた、絵の山よ
りもこよなうみゆ。貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて山の
頂にならび舞と、都良香が富士の山の記に書たり。いかなるゆへに
かとおぼつかなし。

ふしのねの風にたゞよふ白雲を

天津乙女の袖かとそみる

①まさりて—すくれて(松)

②沼—浪(宮)

③鳥—鳥は(松)

④さはぎたり—さりきたり(宮・正・東)—去
来る(松)—さりきたる(扶)

おもて—面(正・東)

⑤わづかに—はづかに(松)

⑦梢—声(松)

⑨浮嶋—浮島か原(松)
神仙—神仏(正・東)⑩あらん—あるらん(宮・松)—有らんと(正
・東)
いとゞ—いと(宮)

⑪ひたす—うつす(宮・正・東)

沼の—なみの(宮・正・東・松)

入えに—入江の(宮・正・東・松)

⑫雲も—空に(宮・正・東)

⑬つぎて—着て(正・東)—つぎて(松)
いふ所—いふ(宮・正・東・松)

浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ。北はふじの麓にて、西東

へはるぐとながき沼あり。布をひけるがごとし。山のみどり影を

浸^{ひた}して空も水もひとつ也。蘆かり小舟所々に棹さして、むれたる鳥

おほくさはぎたり。南は海のおもて遠くみわたされて、雲の波煙の

浪いとふかきながめなり。すべて孤嶋の眼に遮^{まな}るなし。わづかに遠^{おん}

帆^ぼの空につらなれるをのぞむ。こなたかなたの眺望いづれもとり

ぐくに心ぼそし。原には塩屋の煙たえぐ立わたりて浦かせ松の梢

にむせぶ。此原昔は海の上にかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有け

るによりて浮嶋となん名付たりと聞にも、をのづから神仙のすみか

にもやあらん、いとゞおくゆかしくみゆ。

影ひたす沼の入えにふしのねの

煙も雲も浮嶋かはら

やがて此原につぎて千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず、

松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし。沖には舟ども行ちが

- ①松下―松の本の(宮)―松の下の(正・東)―
松のもの(松)
雙峯寺―雙峯寺(正)―雙峯寺(東)
②舟中―舟の中の(宮・正・東・松)―
つくれるに―作れるにも(松)
まさりたり―まさりなり(宮)―勝(すくれ)たり(正
・東・松)

- ⑥賤しきもの―磯もの(宮・正・東・松)
⑦ありかことにして―かことにして(宮・松)
かことにして(正・東)―あるかことにし
て(扶)
⑧かくやありけむ―かくや(松)

- ⑫みしめうちおがみ―みしめう拝み(宮)―み
しめのうち拜み(扶)

- ⑬わたれり―わたり(宮・正・東・松)

ひて、木のはのうけるやうにみゆ。かの千株の松下雙峯寺、一葉
の舟中万里身とつくれるに、彼も是もはづれず。眺望いづくにもま
さりたり。

見渡せば千本の松の末遠み

みとりにつゝく波のうへ哉

車返しと云里あり。或家にやどりたれば、網つりなどいとなむ賤
しきもののすみかや、夜のやどりありかことにして、床のさむし
るもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜半の旅ねも、かくやありけ
むとおぼゆ。

是そこのつりする海士の管庇

いとふありかや袖にのこらん

伊豆の国府にいたりぬれば、三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに、
松の嵐木ぐらくをとづれて、庭の気色も神さびわたれり。此社は伊
予の国三嶋大明神をうつし奉ると聞にも、能因入道伊予守実綱が命

①奉りける―奉りてける(松)
にはかに―暴に(宮・扶)―暴に(正・東)

⑥管根の山……なつむばかり也―管ばかりなり(宮)―管ばかりなる(正・東)

⑧湖―湖水(正・東)

⑩唐家―唐家の(宮・正・東・松)
巖室石龕―巖室石令新(宮)―巖室石龕(正・東)

⑫しるべ―しるべを(正・東)

によりて歌よみて奉りけるに、炎旱の天よりあめにはかにふりて、枯たる稲葉も、たちまちに緑にかへりけるあら人神の御なごりなれば、ゆふだすきかけまくもかしくおぼゆ。

せきかけし苗代水の流きて

又あまくたる神その神

かぎりある道なればこの砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに、管根の山にもつきにけり。岩がねたかくかさなりて、駒もなつむばかり也。山のなかにいたりて水うみ広くたへり。箱根の湖となづく、又蘆の海といふもあり。権現垂跡のもとるけだかくたふとし。朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ、唐家驪山宮かとおどろかれ、巖室石龕の波にのぞめるかげ、銭塘の水心寺ともいひつべし。うれしき便なれば、うき身の行衛しるべせさせ給へなどのりて法施奉るついでに、

今よりは思ひ乱し蘆の海

② 山も一山をも(宮・正・東・松)

③ まさりーまさる(宮・正・東・松)
むせぶーむせひ(松)

⑤ をとかなーをとや(宮・正・東)
いへるーいへり(松)
よられてーよせられて(宮)

⑧ ふりてーふり(宮・正・東・松)
みかさも……あへぬほど也ーみかさもほと
也(宮・正・東)

⑨ いそぐー急て(松)
すゝめられてーさそはれて(松)

⑩ 所々をもー所々を(宮・正・東・松)

⑪ いとーナシ(宮・正・東・松)

⑬ 山ちかくして窓にのぞむーナシ(宮)

深きめくみを神にまかせて

此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば、みたま太山おろしはげし

くうちしぐれて、谷川みなぎりまさり、岩瀬の波高くむせぶ。暢臥房のよるのきゝにもすぎたり。かの源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをとかなといへる、思ひよられてあはれなり。

夫ならぬたのみはなきを古郷の

夢路ゆるさぬ滝の音哉

此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた、雨俄にふりて、みかさもとりあへぬほど也。いそぐ心にのみすゝめられて、大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々をも見とゝむるひまもなくてうち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ。

暮かゝるほどに下りつきぬれば、なにがしのいりとかやいふ所に、あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ。前は道にむかひて門なし。行かち人征馬じんますだれのもとにゆきちがひ、うしろは山ちかくして窓にのぞ

①さまかはりて―やうかはりて(宮・正・松)
―やうかはり(東)

③つれぐも―つれつれもなく(宮・松)
和賀江―わかへ(宮・正・東)

④三浦の―うらの(松)
海上の―海の(東)

⑤所々―所(松)
おぼゆ―ナシ(宮)―おほゆる也(松)

⑥さひしさは……沖のつり舟―ナシ(宮・正・東・松)

⑧玉よする……影のさやけさ―ナシ(宮・正・東・松)

⑩故右大將家―右大將家(宮・正・東)―故右
將家(松)

給ふ―たまふは(松)
⑪はつえを―はつえ(松)

さりにし―去さりにし(東)
⑫隴山の跡をつぎて―はかりて(宮・正・東)
―くはりて(松)

⑭その―ナシ(宮・正・東・松)

む。鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし。旅店の都にことなるさまかはりて心すごし。

かくしつゝあかしくらすほどに、つれぐもなくさむやとて、和賀江のつき嶋、三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば、海上の眺望哀を催して、こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ。

さひしさは過こしかたの浦々も
ひとつなかめの沖のつり舟

玉よする三浦かさきの波まより

出たる月の影のさやけさ

そとせも
抑かまくらのはじめを申せば、故右大將家と聞え給ふ、水の尾の御門の九の世のはつえをたけき人にうけたり。さりにし治承のすゑにあたりて、義兵をあげて朝敵をなびかすより、恩賞しきりに隴山の跡をつぎて、將軍のめしをえたり。営館をこの所にしめ、仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた、今繁昌の地となれり。中に

①松柏の—松柏(宮・正・東・松)

②陪従を—陪従を(正)―陪従を(東)―陪従

(松)―職掌(正・東)

③八月の—八月(松)
いつくしみ―いつくしみ(松)

④鼻の鐘―かものかね(宮・正・東・松)

⑤ありと―ふりと(宮・正・東)―籠(松)

⑥あらたなる―あみたなる(東)

⑦祇宗―紙窓(扶)

かさね―かさね(扶)

金磬―金磬(宮・正・東・松)

ひゞき―えたき(宮・正・東)

⑧社―やし(東)

蓬の寺―律のる(宮・正・東)―律の寺(松)

これ―ナン(東)

⑨そのほか―その中にも(宮・正・東・松)

由比の浦―由井の浦(宮)―湯井の浦(正・東)

大仏を―大ほとけ(松)

も鶴岡の若宮は、松柏のみどりいよ／＼しげく、蘋蘩ひんぱんのそなへかく

ることなし。陪従べいじゆうをさだめて四季の御かぐらをこたらず、職掌しきじやうに仰

て八月の放生会はうじやう会ををこなはる。崇神のいつくしみ本社にかはらずと

聞ゆ。

二階堂はことにすぐれたる寺也。鳳ほうの慶日いらいかにかぐやき、晝かの鐘かね霜

にひゞき、楼台の莊嚴よりはじめて林池のありとにいたるまで殊に

心とまりてみゆ。大御堂ときこゆるは、石巖いしがきのきびしきをきりて、

道場のあらたなるをひらきしより、禅僧庵をならぶ、月をのづから

祇宗の觀をとぶらひ、行法座をかさね、風とこしなへに金磬きんけいのひゞ

きをさそふ。しかのみならず、代々の將軍以下つくりそへられたる

松まつの社やしろ蓬よもぎの寺やしろまぢまぢにこれおほし。

そのほか由比の浦と云所に阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよしかた

る人あり。やがていざなひてまいりたれば、たふとくありがたし。

事のおこりをたづぬるに、本は遠江の国の人定光上人といふものあ

- ①すすめて―すゝめ(松)
- ②建たり―たてり(宮)
功―石切(宮)―みぎり(正・東)
- ③あらたに―あしたに(宮)
- ④両三年の―両三年に(正・東)
すみやかに―なり―すみやかに也(宮)
又―ナン(宮)
- ⑤望むに―たちまちに(宮・正・東・松)
金銅―金堂(宮・正・東)
- ⑥盧舎那仏―樓遮那仏(正・東)
るしやなぶつ
- ⑦御長―長(宮・正・東・松)
なれば―ナン(東)
よりも―より(宮・正・東)
すぐめり―すゝめり(松)
- ⑧権化―権現(松)
- ⑨くらく武にも―くらすたけにも(宮)―くらく武にも(正・松)―てらく武にも(東)
- ⑩かすならぬ―数しらぬ(松)
まゝには―まゝに(宮・正・東・松)
こひしき―恋し(宮・正・東)
帰べき―かるべき(正・東)

り、過にし延応の比より関東のたかきやしきをすすめて、仏像をつくり堂舎を建たり。その功すでに三か二にをよぶ。烏瑟たかくあらはれて半天の雲にいり、白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやかす。仏はすなはち両三年の功すみやかに、堂は又十二楼のかまへ望むにたかし。彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作金銅十丈余の盧舎那仏なり。天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ。此阿弥陀は八丈の御長なれば、かの大仏のなかばよりもすぐめり。金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりてはこれも不思議といひつべし。仏法東漸の砌にあたりて、権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ。

かやうのことどもを見聞にも、心とまらずしもはなけれども、文にもくらく武にもかけて、つるにすみはつべきよすがもなきかすならぬ身なれば、日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき。帰べきほどとおもひしもむなしく過行て、秋より冬にもなりぬ。蘇武が漢を

① 李陵—季陵(松)

② やゝ漸(松)

③ まされる—増る(正・東)

懐古—懐土(宮・松) —壞土—(正・東)

④ 空に—雲に(松)

消ゆく—きゝゆく(宮) —聞えゆく(正・東)

⑨ こゝろの—比の(宮) —比(松)
にも—も(宮・正・東・松)

⑩ さかひ—さかへ(宮・正・東・松・扶)

⑫ 故郷へ—ふる里に(宮・正・東)

こからしに—木からしは(宮・正・東・松)

⑬ ほかの—ほかめ(宮)

⑭ おもむくに—おもむく(宮・正・東・松)

別し十九年の旅の愁、李陵が胡にいりし三千里のみちの思ひ身にし

らるる心ちす。聞なれし虫の音もやゝよはりはてて、松ふく峯のあ

らしのみぞいとどはげしくなりまされる。懐古のこゝろに催されて、

つくづくと都のかたをながめやる折しも、一行の鴈がね空に消ゆく

も哀なり。

かへるへき春をたのむの鴈かねも

なきてや旅の空に出にし

かゝるほどに神無月の廿日あまりの比、はからざるにとみの事あ

りて都へかへるべきになりぬ。其こゝろのうち水ぐきのあとにもか

きながしがたし。錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらねども、

故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす。

故郷へ帰る山ちのこからしに

おもはぬほかの錦をやきむ

十月廿三日の暁、すでに鎌倉をたちて都へおもむくに、宿の障子

②なれぬれは―なれぬれと(宮・正・東・松)
今朝なれと―けさなれは(宮・正・東・松)

に書付。

なれぬれは都を急く今朝なれと

さすかなこりのおしき宿哉

右東関紀行上木行于世之本称鴨長明所著今扱夫木抄所

載従古本定為源親行作比较已了

底本にはないが、宮内庁書陵部蔵本・正保五年板本・東京大学図書館蔵本には、次の「吾妻鑑第十九云」以下の文がある。今、正保五年板本によって、その全文を示す。

アツマカヅミ
吾妻鑑第十九云

建曆元年十月十三日
辛未 卯 鴨社氏人菊大夫長

明入道法名 蓮風依ヲニ雅マサフネ経朝臣之ノ挙キヨヒコニ此間下向奉ルレエツシ調ツニ將軍

家^ヤ実^ト朝^ニ及^ニ度^々云^々而^ル今^ニ日^ニ当^ル幕^下将^軍御^忌日^ニ参^ル

彼^カ法^ハ花^ツ堂^ニ念^シ誦^ス説^キ經^ノ之^ノ間^ニ懷^ク旧^ノ之^ノ涙^ヲ相^シ催^ス註^ニ一^ノ首^ノ歌^ヲ於^テ堂^ノ柱^ニ

草も木もなひきし秋の霜消て

むなしきこけをはらふ山かせ